

あれから私は

阪神大震災20年

◆ 3 ◆

「うるはしき 唐破風も
ちし 拜殿は 地上に這ひ
て 獣のごとし」

の拜殿を前にして浮かんだ歌だ。

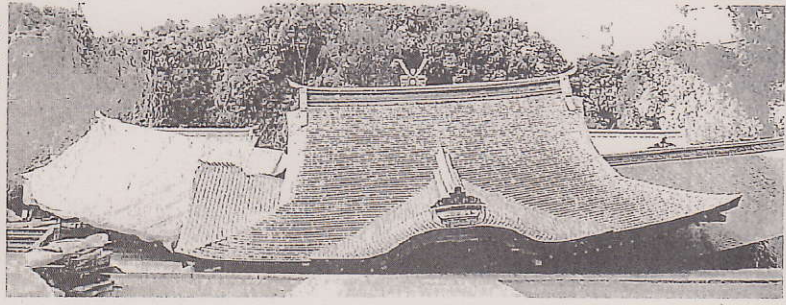
生田神社(神戸市中央区)の宮司だった加藤隆久さん(80)が、阪神大震災で柱が倒れ、曲線の意匠を持つ屋根が地面に突っ伏した状態

年末年始の疲労がたまっていた1995年1月17日早朝。地面を突き上げる揺れで目が覚めた。震災に耐えた石製の鳥居は根元から崩れ落ちて粉々になっていた。

生田神社の周辺には神社の経済的基盤となった土地や民衆を意味する「神戸」があり、それが地名の由来になったとされる。神社は日本書紀に登場し、源平合戦の舞台になるなど歴史は古い。

「私も町も全部駄目だ。絶望感でぼうぜんとなるなか、亡き父の声が聞こえた。「駄目やと思ってるから駄目や。おまえはやることを一つ忘れてる。おまえの使命は神社の再建や」

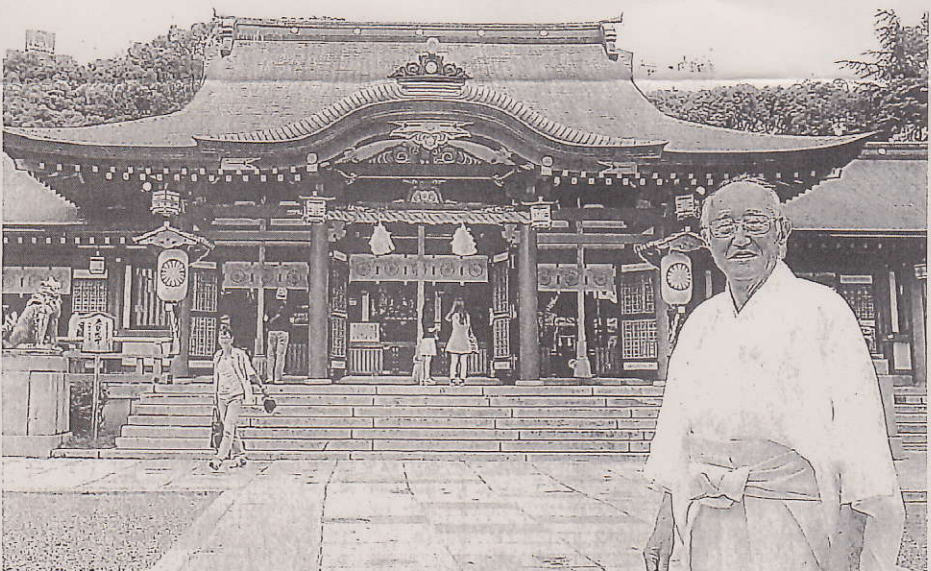
父は戦時に宮司として、空襲で鳥居だけが残った神社を再建させた。「神戸とともに栄えてきた神社を復興させる」ことが町全体の復



被災直後の生田神社(神戸市中央区)生田神社提供

神社再建、復興の象徴

宮司の使命感、祭事欠かさず



生田神社の前で笑顔を見せる名誉宮司の加藤隆久さん＝8月15日、神戸市中央区

に会場を提供、約2千人が心を和ませた。翌年の節分の時期には米歌手のシンデイ・ローパーさんが豆まきに訪れ、約1万5千人でにぎわった。

例祭や七夕祭り、夏祭り。時折「まだ早いのでは」との声も聞こえたが、祭りの準備を通じて地域が再びつながり、みんなに元気が湧いてくるのが分かった。

「朱に光る 唐破風今こそそびえたち 羽を広げし 真名鶴のごと」。震災から1年半後、社殿の修復を終え、思わず気持ちを歌にした。

「順風満帆な人生にも必ず挫折が訪れる。その時に駄目だと思つのか、乗り越えていくのか。心の切り替えが大切だ」。これからの担う世代に伝えたい。

「町の復興を見届け、使命を全うできた。震災からまもなく20年。後進に道を譲る時だ」。今年6月、宮司を勇退し、名誉宮司となった。

興の象徴になるはず」。加藤さんの胸にやる気がこみ上げ、その役割を担えることに喜びさえ感じた。

先端技術と伝統工法を取り入れた耐震構造の拜殿を建造し、伊勢神宮(三重県

伊勢市)から木製の鳥居も譲り受けた。国内外から多くの寄付金も集まった。

再建中の境内でも祭事や行事を欠かさなかった。95年11月、地域では受け入れが難しかったオーケストラ